

## 【教育研究創発機構・学校臨床総合教育研究センター共催 公開研究会】

### シンガポールの教育から学ぶ

■日時：2004年11月10日（水）13:30～16:00

■場所：東京大学教育学部棟 第一会議室

■発表：クリスティーン・リー（シンガポール国立教育研究所）

：シム・チュン・キアット（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

#### ■概要

本公開研究会においては、学校臨床総合教育研究センターの客員教授、クリスティーン・リー氏と、東京大学大学院博士課程在籍のシム・チュン・キアット氏に、シンガポールの教育について発表していただいた。

最初に講演されたリー氏は、シンガポール唯一の教師訓練・養成機関であるシンガポール国立教育研究所（National Institute of Education, 以下NIE）の教授で、社会科の指導が専門である。広くカリキュラム改革、授業研究、多文化教育、エスニックの問題など、学力と学習に関連した領域で研究をされている。

まず氏はシンガポール教育省によって作られたシンガポールの教育紹介ビデオを上映。多民族国家として、新時代にあった、活動的で優れた国民を形成していくというメッセージを視覚的に伝えるものであった。

続き、氏は、「考える学校、学ぶ国家」（Thinking Schools, Learning Nation）という同国の教育政策を紹介。「考える力」を育成していこうとする改革路線が説明された。さらに今日では、頭脳だけでなく、心も、よき国民の形成を促すため、全人教育志向が政策として強まってきており、いろいろな子供たちに対応して、知育偏重にならない、人格教育なども組み入れた能力ベースの教育が試みられているという。

さらに氏は、同国では投資として教育に資金が投入され、国家の重要課題になっている点を強調。中央集権的な国家カリキュラムを持ち、NIEは唯一の教師養成機関として、すべての教師や校長の研修も非常に体系的に行っていること、そして、この共通カリキュラムを教える教授用語が英語であり、それが多民族に公平であり、グローバル社会のニーズにも応えるものとして理解されていること、IT化が促進されていること、などが紹介された。

こうした中で、シンガポール人としての自覚を持った

道徳的な価値を身につけていくことを重視しつつ、英語と母語のバイリンガル教育に関してはかなり厳しい政策がとられていることも特徴として挙げられた。

また、能力別トラックが早くから導入され、9歳の終わり（小学校4年生）から、英語と母語のレベルにより、高いほうからEM1、EM2、EM3の三つの能力別ストリームに分かれることを紹介。その後も、高校へのOレベル、高等教育へのAレベル、といったコースに、厳しい試験によって振り分けられていく同国の教育システムについて説明があった。

ただし2004年からの改革で、EM1とEM2が合併されたことをはじめ、バイリンガル教育や、大学の入学資格、教師訓練の場においても、規制緩和が進んでいるという。

次にカリキュラムについて、90年代に登場した「考える学校、学ぶ国家」というコンセプトが紹介された。プロセスや「考える力」を養う時間を重視し、「ティーチ・レス・ラーン・モア」（‘Teach Less, Learn More’より少なく教えてより多くを学ぶ）という方針が打ち出され、教える方法の変化を反映し、評価の方法も変化してきている、という。

さらに、私立セクターによって担われている就学前の教育から、小学校以降の公立システムへと適応をスムーズにし、より連携を深めようとするSEED（Strategies for Effective Engagement and Development）プロジェクトなども紹介された。

最後に氏は、小さな国家である同国が、さまざまなグローバルな競争の中で勝ち残っていくために、今までよりも創造的な資質を持った優秀な働き手を作っていくことが、今後の同国の教育の課題だとする。さらに、共働き家庭が多いことから派生する教育の問題、階層が高くない子供たちの学力保障、海外からの移住者への教育、母語教育の遅れ、なども課題として残されている、とする。

引き続き講演をされたシム氏は、本学教育学研究科博士課程に在籍し、シンガポールと日本両国のメリトクラシーの研究と選抜度の低い学校での教育について比較研究を行っている。氏は、両国ともエリートがよく勉強する点では共通だが、特にシンガポールの下位校では、

日本と異なり、メリトクラシーの規範が維持されつつ、生徒たちの学習意欲も高い点に着目する。

氏はシンガポールの下位校、技術教育校である、「インスティテュート・オブ・テクニカル・エデュケーション（以下ITE）」を紹介。中学校卒業後、全体の1/4が進学するこの学校の生徒たちは、出身階層も低く、そのほとんどが上位校への入学資格さえ持たない。この学校に進む学生は、主に中学の一番下位のトラックから来る人が多く、さらにその殆ども小学校ではEM3コースの生徒である。トラック間のカリキュラム自体が異なることから、小中学校でのトラック間のモビリティは限られているのである。

ところが、氏の調査によれば、これらの下位校出身の生徒がITE入学後にそれまで低かったアスピレーションが急に上昇し、学習にも時間を費やすようになる、という。その背景として、ITEは、卒業生や企業を調査し、将来の仕事の中身と合うようにカリキュラムや指導方法を常に見直しつつ、教師から生徒に勉強の重要性を強く説き、卒業生の「サクセス・ストーリー」を生徒に頻繁に伝えることで、将来の展望が広がるように工夫されていることを挙げる。また、シンガポールはポリテクニクも大学も国立なので、収入の少ない家庭出身でも努力次第で進学は可能なので、ITEからポリテクニク、さらに大学へという敗者復活のルートが明確であることも紹介された。

このようにして、同国では、まず9歳でアカデミックなルートに適さない人を早期に選び出し、中学卒業後に別の競争ルートを提供し、それによって彼らの学習意欲を再燃させ、メリトクラシーを維持している、ということが特徴だ、と氏は述べる。

つぎに氏は両国の下位校についての比較分析を行う。分析課題は、「インプット」——どのような生徒がどのような動機を持って下位校に入学するのか。「スループット」——学校の授業や先生について生徒はどう考えているのか。そして「アウトプット」——生徒の進路希望に見られる教育アスピレーション及び学習意欲についての比較、の3つである。

氏のシンガポールと日本両国の上位校と下位校における調査の結果によれば、まず両国とも上位・下位校間の学力差はともに大きいことが歴然とした。さらに入学動機を調べると、両国とも、下位校は「成績が低いのでしかたなく」という例が多いものの、シンガポールのITE

では「進学に有利」という回答率も高い。他方、日本では下位校の専門学科は上位校への進学機関ではないし、技術もそれほど身につかない、という認識がある。こうしたことから、氏は「ダブルチャンスのシンガポール下位校VSノーチャンスの日本下位校」ということができる、と述べる。

つぎに、スループット、学校への授業や先生についての考え方の比較について、氏は「元気なシンガポール下位校VS元気のない日本の下位校」という対比を掲げる。学校での学習について、授業が面白いのか、自分で考えたか、調べたり、問題を解決したりする授業が多いかどうか、といった質問に対して、シンガポールは好意的な回答が多いのに対し、日本は少ない。また、先生については、「先生も勉強が重要だと強調しているか」「先生は自分が良い成績をとることを期待しているか」といった点で、シンガポールが高いポイントを示したのに対し、日本では低い結果となった。そこで、日本では、授業が面白くないだけでなく、先生も元気が欠けているのではないかと氏は問いかける。

アウトプットについては、上述のとおり「学習意欲の高いシンガポール下位校生徒VS低い日本下位校生徒」という特徴が再び浮かび上がる。また、両国とも授業を面白いと思う生徒、先生が優れていると思う生徒ほど、家で勉強する時間が長くなる傾向がある。

これらの調査のまとめとして、氏は、進学の段階で、日本の下位階層の人たちは、敗者復活のチャンスが無いので、そのことが必然的に、日本の下位校の生徒のアスピレーションや学習意欲が共に低いことにつながる、と指摘。しかしながら、スループット、すなわち、授業や先生の態度は、生徒のアスピレーションにも影響を与えるので、色々な教育投資をして授業が面白くなるように工夫し、先生も研修を受けるなどしてスキルアップしていけば、日本の下位校でも生徒の関心・学習意欲を高めることは十分に可能であろう、と提示する。特に、下位校の在り方は、意欲の低い若者の問題だけでなく、階層間不平等の問題、ひいては日本の将来にも関係する問題なので、下位校への教育投資と改革が急務となるべきだ、と氏は結んだ。

その後の質疑応答のなかからは、下位校の生徒の問題行動と、その対応に追われる教師が授業を面白く工夫しようとするものの難しさも、浮かび上がった。